



図書館蔵書検索システムの紹介

井上 千聡、西村 和代

I. はじめに

当院図書館では利用者が蔵書を検索するには、従来目録カードによる検索方法しかありませんでしたが、ようやく蔵書検索システムが完成したので報告します。

II. 図書館の概要

図書館の蔵書数は現在、単行本が約12,000冊(一般書約6,900冊、健康図書約320冊、闘病記約160冊、児童書約580冊、医学専門図書約4,200冊)となっています。100㎡足らずのスペースで、情報、資料を職員と入院・外来患者さんおよび地域の方々と共有し、開放しています。このような蔵書構成になっているのは、当院図書館が、いわゆる患者図書サービスを開室当初より行っている図書館であるためです。利用者の割合は、病院職員が約55%、入院・外来患者さんや地域の方々が約45%を占め、利用冊数では職員が約33.8%、職員外が66.2%となっています(図1)。

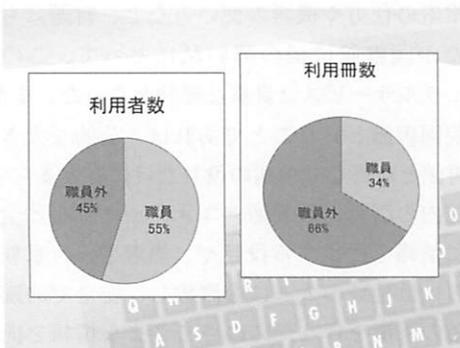


図1 利用状況 (職員：職員外)

III. 蔵書管理と検索方法の変遷

当院で図書館業務を開始したのは、1966年8月からです。医局や各部署の図書を集め蔵書登録を行い、原簿での中央管理を始めました(図2~8)。

1970年代になって、目録カードを作成するようになり、初めて利用者による書名、著者名、分類別からの蔵書検索が可能となりました。しかし、目録カードが整備されているのは一般書の一部であり、司書に尋ねた方が早いのが現状

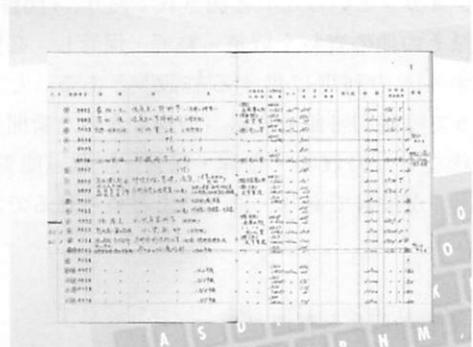


図2 図書原簿

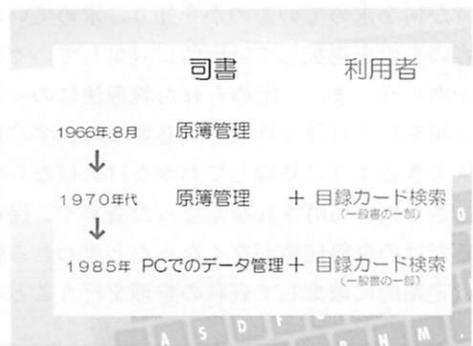


図3 蔵書管理の変遷1

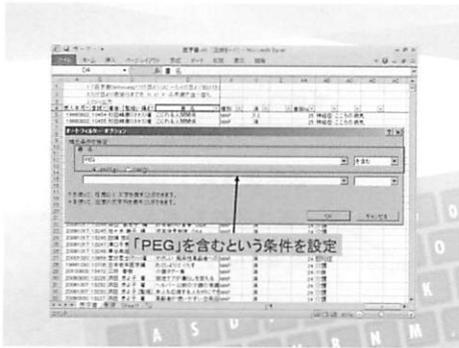


図4 Excelによる図書検索

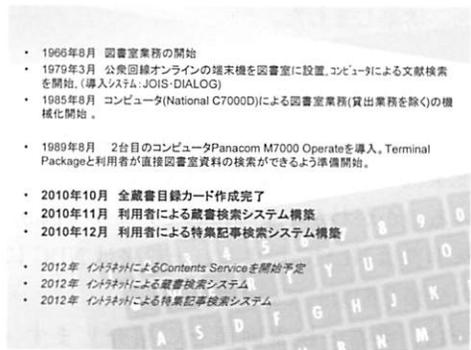


図8 図書室の沿革 (一部抜粋)



図5 Excelによる図書検索結果

であり、整備を急ぐ必要性を感じていました。

1985年に図書館に初めて、コンピュータが導入され、以降のデータはコンピュータ管理できるようになり、作業効率是一段と向上しました。

その後、Windowsの登場により、Excelでの蔵書管理へと移行し蔵書検索は、オートフィルタ機能を使った検索を司書が代行していました。

この頃より図書館向けの蔵書管理ソフトが市販されるようになりましたが、利用者がアクセスできる機能のあるものは大変高価でした。

そこで、目録カードとシステム検索に対応できるように、データの整備を進めていきました。2007年の図書館移転を契機にその作業を加速させ、データ入力、修正を重ね、ようやく2010年10月に全蔵書の目録カードの作成を完了し、利用者による全蔵書の目録カードでの検索が可能になりました。

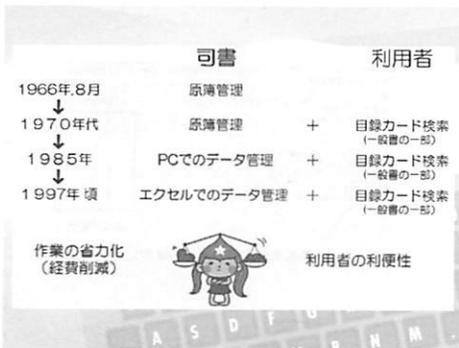


図6 蔵書管理の変遷 2

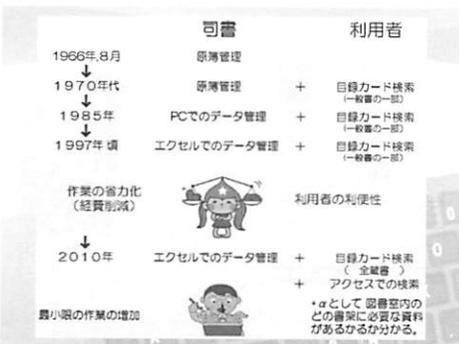


図7 蔵書管理の変遷 3

IV. 蔵書検索システムの導入

しかし、この頃までには、既に公共図書館のみならず、大型書店では求める資料の検索を利用者自らが簡単に行えるようになっており、当院利用者からもカードだけではなくパソコンでの検索を要望する声が大きくなっていました。一方、2007年に図書館がアクセスの悪い場所へ移転し、利用者数、利用冊数は大幅に落ち込み、同時に院内での期待度、評価も低下しました。この状況を少しでも改善しようと、利用者サービスの原点に立ち戻り、「蔵書検索システム」を

企画、構築しました。

V. 「蔵書検索システム」の紹介

図書館内に掲示および利用案内に挿入している配架図で図書館の蔵書がどのように並べられているのかわかるようにしています(図9)。

医学書はNLMCにより、一般書はNDCにより、分類し配架しています。

では、実際の検索画面をご紹介します(図10~13)。

書名に「PEG」を含む図書が図書館にあるかどうか検索します。

検索結果と件数が表示され、4件が見つかりました。右の欄に本の場所が表示されます。書架にはすべてNo.を明記しており、配架図をNo.に置き換えた図を検索システムが利用できるPC前に掲示しています(図14)。

書架No.の所に行けば、検索された図書を見つかけられます。

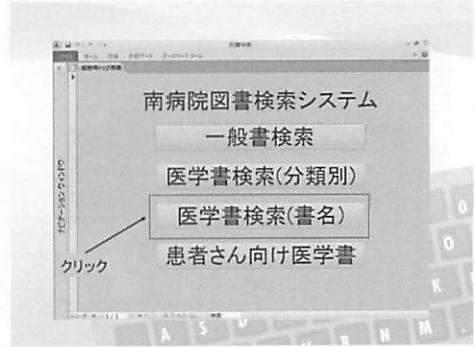


図11 医学書検索(書名)トップ画面

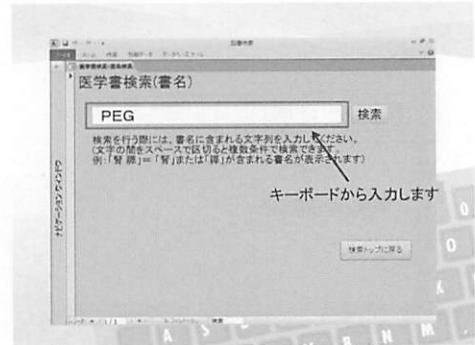


図12 医学書検索(書名検索)

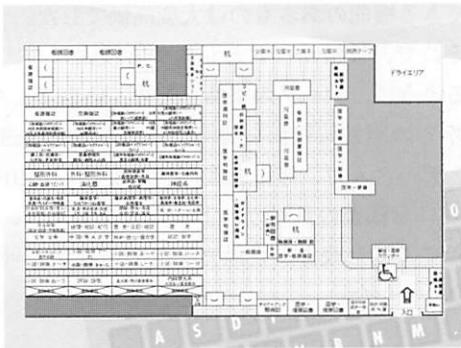


図9 図書配架図

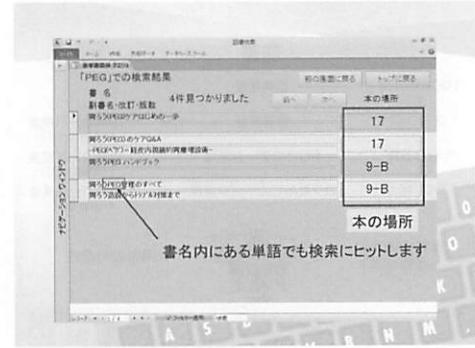


図13 フリーワードでの検索結果



図10 NLMC(図書分類法)

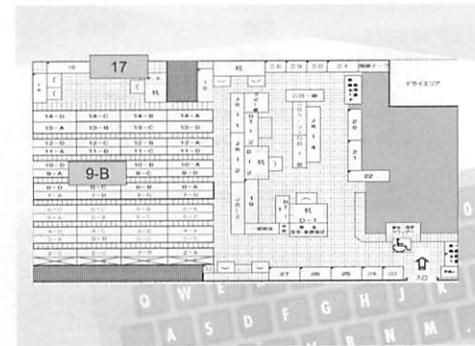


図14 図書配架図 No.

「B型肝炎」について書かれている書籍がどこに配架されているか知りたい場合は、図15~18の手順で行います。

検索結果と件数が表示され、4件が見つかりました。右の欄に本が表示されます。

「患者さん向け医学書」は、病名、主題で検索できるようになっています(図19~21)。

「一般書検索」では、「書名」「著者名」のおのおの両方から検索することができます

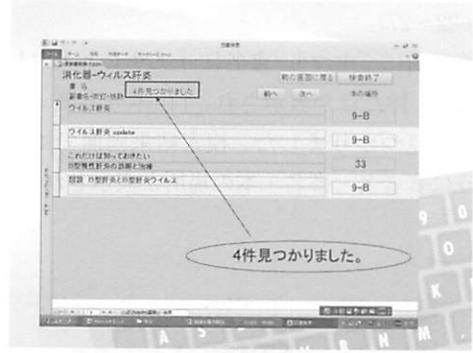


図18 医学書検索結果(分類)

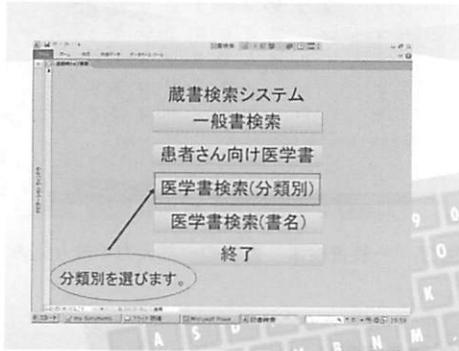


図15 医学書検索(分類別)トップ画面

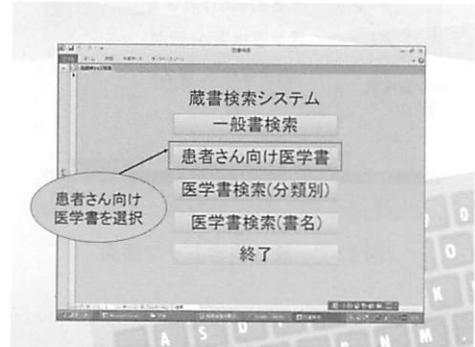


図19 患者さん向け医学書検索トップ画面

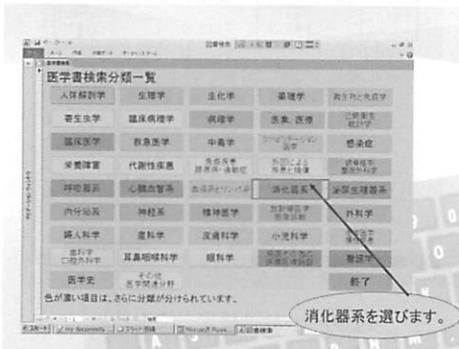


図16 医学書検索(分類別)画面1

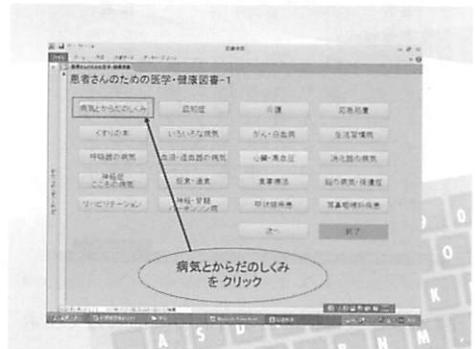


図20 患者さん向け医学書検索画面1

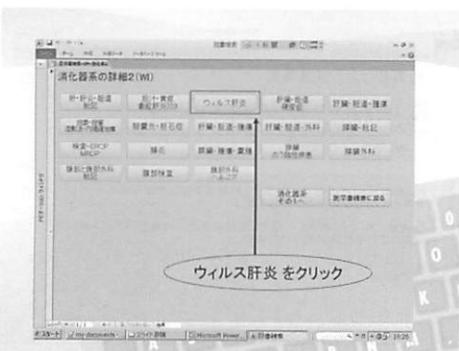


図17 医学書検索(分類別)画面2

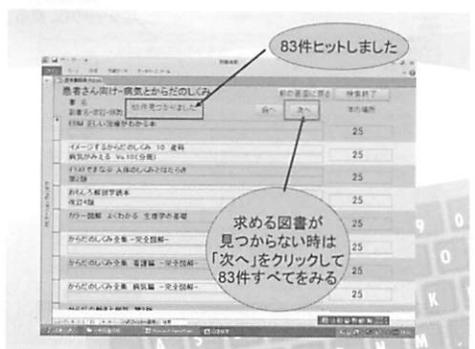


図21 患者さん向け医学書検索画面2

(図22~27)。

著者名に「ヤマ」、書名に「アサ」と入力した結果、1件だけが表示され、「山本一力著 朝の霧」が見つかりました。検索結果画面ではこのように著者名・書名・本の場所が表示されます。

従来の目録カードでの蔵書検索も併用しており、利用者はこの二つの方法を選べるようになりました。

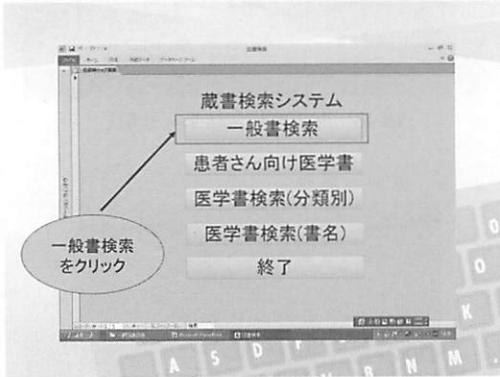


図22 一般書検索トップ画面

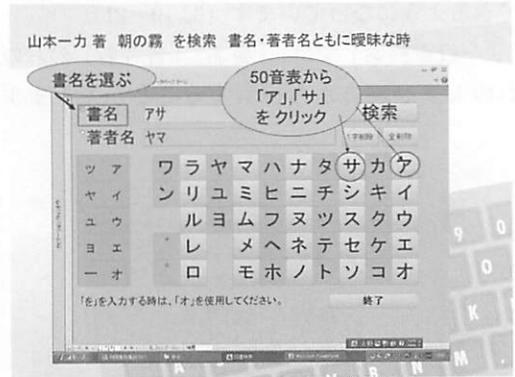


図25 一般書検索 書名の一部入力で絞り込み

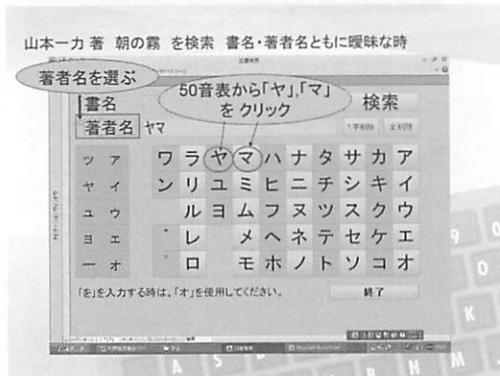


図23 一般書検索 著者名の一部入力で検索

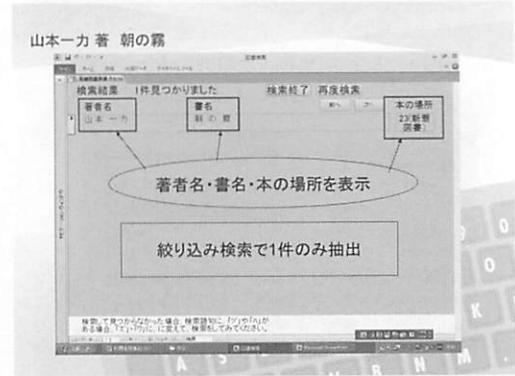


図26 一般書検索 検索結果

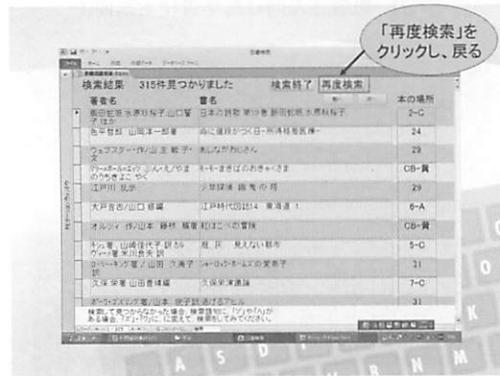


図24 一般書検索 絞り込み

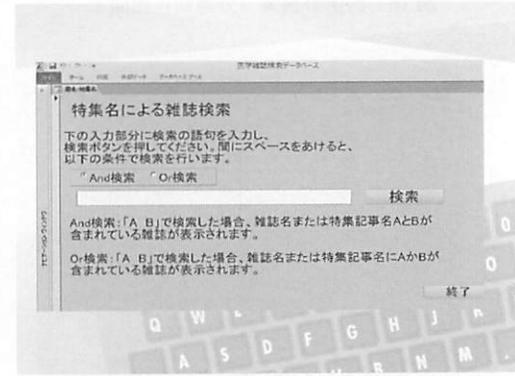


図27 雑誌特集記事検索トップ画面

VI. 「雑誌特集記事検索システム」

1980年代から雑誌特集記事検索は、蔵書検索同様エクセルのオートフィルタ機能を使った検索を司書が代行していました。その後、利用者

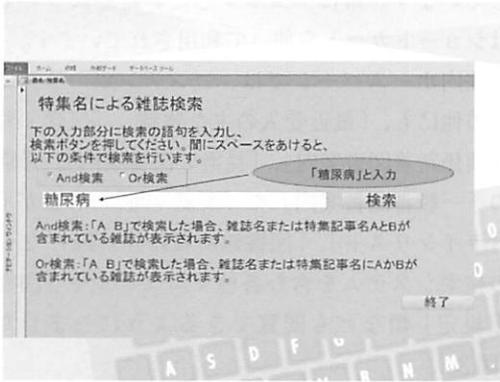


図28 雑誌名・特集記事および付加した備考欄に「糖尿病」を含む特集記事を検索

による市販のCD-ROMでの検索を経て、医中誌 Web 版での検索が可能となり、入力業務を2004年に中止しました。しかしながら、所蔵している雑誌の特集記事は、以前のように検索できるようにしてほしいとの要望に応えるため、利用者が検索できる新しいシステム「雑誌特集記事検索システム」を2010年12月に、構築しました。

「糖尿病の合併症」を検索する場合、図27～32の手順で行います。

「and 検索」と「or 検索」を使い分けることにより、より詳細な検索が可能となります。

VII. コンテンツ・サービス

従来は、コンテンツ・サービスを紙媒体で行っていましたが、イントラネット上に up す



図29 雑誌特集記事「糖尿病」での検索結果

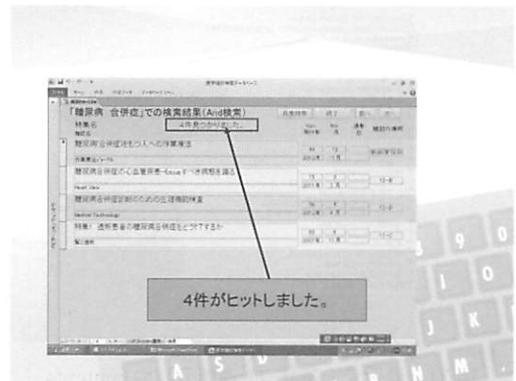


図31 「糖尿病」と「合併症」の and 検索結果

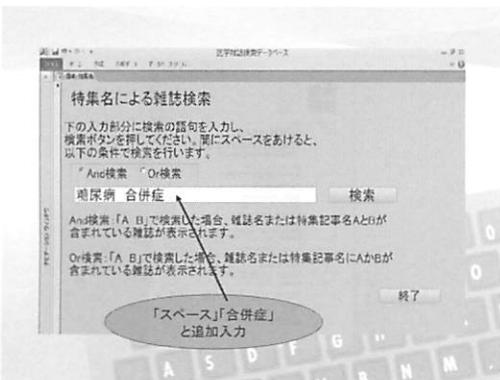


図30 「糖尿病」と「合併症」の and 検索

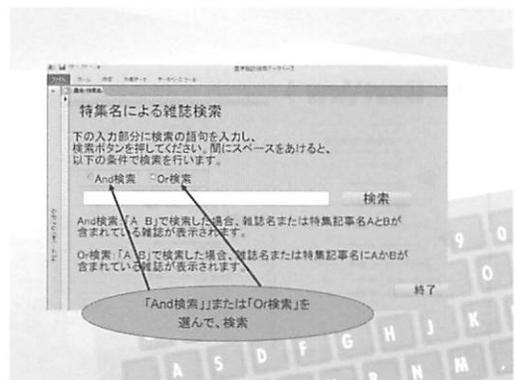


図32 and 検索と or 検索

る事により、全職員が院内ホームページよりPDFファイルで閲覧可能となりました(図33~37)。

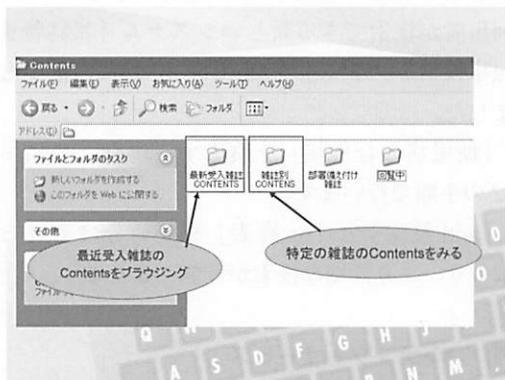


図33 コンテンツ・サービス

この「Contents」フォルダ内には「最新受入雑誌 Contents」(1週間分)、「雑誌別 Contents」、他部署に別置している「部署備え付け雑誌」、他部署へ回覧中の「回覧中」の各フォルダを作り、用途別に閲覧しやすくし、週1回データ更新をしています。常にチェックしたい雑誌についてはショートカットを使って利用されています。

院内ホームページでは、コンテンツ・サービスの他にも、「最近受入の主な雑誌」、「医学・看護関係新着図書案内」、「見計り図書案内」、月別の「一般書図書案内」や「所蔵 診断・治療ガイドラインリスト」、「図書館所蔵雑誌目録」、2つの検索システムを含む各種マニュアルや「図書館規定」類なども閲覧できるようにしました(図38)。

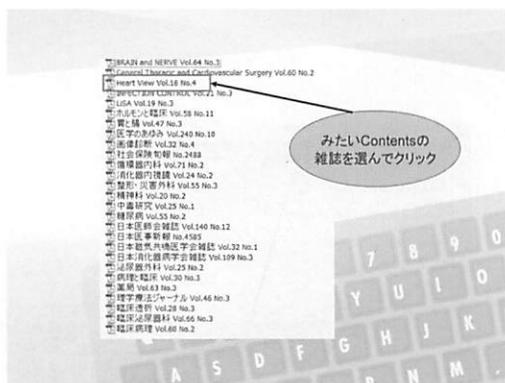


図34 最近受入雑誌(1週間分)のcontents

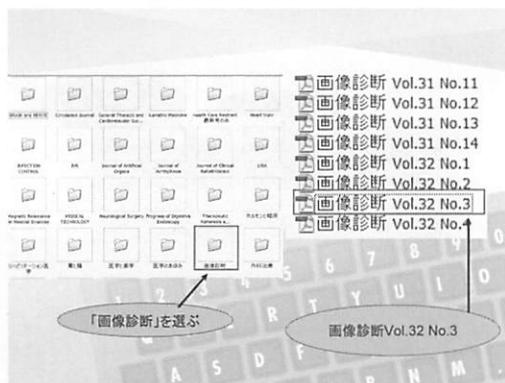


図36 雑誌別 contents より雑誌を特定して閲覧する

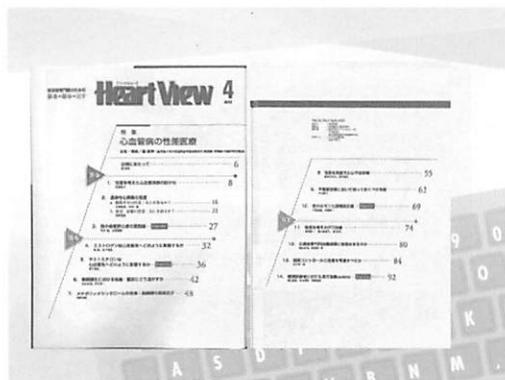


図35 Heart View Vol.16 No.4 contents



図37 画像診断 Vol.32 No.3 contents



図 38 イン트라ネット上で閲覧可能なファイル

VIII. 今後の課題

今回ご紹介しました2つの「検索システム」は利用者に頻繁に利用されており利用者の利便性を少しは向上できたと言えます。しかし、まだ問題点も多く残っています。例えば、患者さん向けにはタッチパネルでも対応できる、また、職員がイントラネット上で検索できる、その次には貸出・予約機能と併せるシステムにするな

ど、利用者がより使いやすいものになるよう改善していきたいと思っています。

IX. 最後に

今回報告した2つの検索システム構築の際には、データの整備に多くの時間を費やしました。求める資料が図書館にあるのに、ヒットしないという事態にならないように、「蔵書検索システム」では書名・副書名・著者名、特に分類の正確性、精密性に神経を使い、「雑誌特集記事検索」では画面には現れませんが、備考欄を設け、考えられるキーワードを入力し、そのキーワードからも検索できるようにしました。

検索システム構築と言っても、ツールが2つ増えただけのことですが、当院図書館のような小さな図書館にとっては、大きな一歩と言えるでしょう。

今後も利用者ニーズに応えられるよう、図書館の仕事を地道に、丁寧に積み上げていきたいと思っています。